

第15回東海小児整形外科懸話会

当番幹事：小野芳裕

日時：平成12年2月12(土)

場所：大正製薬(株)名古屋支店 8階ホール

一般演題

1. 鏡視下滑膜切除術を行った乳児化膿性膝関節炎の1例

海南病院整形外科

○村上里奈・西源三郎・多湖教時
土屋大志・向藤原由花・奥地裕
奥村弥

名古屋市立大学整形外科 和田郁雄・松井宣夫
名古屋市総合リハビリテーションセンター整形外科

池田威

症例は10か月女児、39°Cの発熱があり、小児科を受診し感昌と診断され投薬を受ける。しかし、その後つたい歩きができなくなり、左膝関節の腫脹が見られたため、整形外科を受診、関節穿刺で排膿を認め、発症約10日後、関節鏡にて関節洗浄および滑膜切除術を施行した。術後約4年半後の現在、経過良好である。乳児化膿性膝関節炎に対する鏡視下滑膜切除術の報告は少ない。文献の考察を加えて報告する。

2. 両側先天性恒久性膝蓋骨脱臼の1症例

岐阜大学整形外科

○金森康夫・吉田実・伊藤芳毅
糸数万正・清水克時

きくいけ整形外科 喜久生明夫
岐阜県立希望が丘学園 徳山剛

比較的稀とされている両側先天性恒久性膝蓋骨脱臼の1症例を経験した。症例は4歳男児、生下時より下腿の外施変形・両側膝蓋骨脱臼を認め保存的に治療されてきた。しかし治癒傾向認めず、Baski法に準じた観血的整復術を行った。術後約半年であるが再脱臼、関節可動域制限等を認めず経過良好である。若干の文献の考察を交えて報告する。

3. Pterygium syndromeの1例

三重大学整形外科

○松原孝夫・森田哲夫・平田仁
加藤公・内田淳正

症例は4か月男児、39週、正常分娩であったが、出生時左筋性斜頸、左橈側列欠損、左前置睾丸、左膝窩部翼状皮膚、左内反足の存在に気づかれた。先天性関節拘縮症の合併は見られなかった。血縁者に同様の奇形を認めてはいない。膝関節は翼状皮膚により伸展が -45° と制限されていたため、3か月時にZ形成術を行った。その際鷲足の付着部異常を認め、また、坐骨神経、膝窩動脈も後方転

位し、これらも膝伸展障害の一因となっていることが気づかれた。いわゆる pterygium syndrome の一例と思われるが正確な診断は不明。

4. 鈍的外傷後の筋内に生じた癭痕組織による尖足の1例

岐阜県立希望が丘学園

○岩佐一彦・高見秀一郎・徳山剛
症例は15歳男性、学校の教室で転倒しストーブの角で左ふくらはぎ部を強打し以後尖足のままとなり、2年ほどしてから治療のために来院した。矯正ギプス等の保存的治療による効果は得られず、MRI上広範囲に変性像の見られたひらめ筋内の癭痕切除と腱膜切開による腱延長術を行い改善が得られた。

5. 仙骨類骨骨腫による脊柱側弯症

藤田保健衛生大学整形外科

○花村俊太郎・中井定明・吉澤英造
小林茂・志津直行・和田邦央
浅井貴裕

患者は11歳の女児で、脊柱側弯を主訴として外来を紹介受診した。検索の結果、仙骨の類骨骨腫が発見され、腫瘍が仙髄神経根を圧迫している所見が得られた。観血的に腫瘍を摘出することにより、脊柱変形は消失した。

6. 脊椎肋骨異骨症の臨床像とX線所見

静岡県立こども病院整形外科

○滝川一晴・芳賀信彦

脊椎肋骨異骨症(spondylocostal dysostosis, 以下SCD)は、肋骨奇形を伴う多発性脊椎分節異常のために体幹短縮型の小人症をきたす先天性疾患である。しかし、本邦では報告が少なく、特徴については不明な点が多い。当科で経過観察中のSCD症例をもとに、その臨床像とX線所見について検討し報告する。

7. 早期に診断し得た乳児化膿性股関節炎の2例

海南病院整形外科

○奥地裕・西源三郎・多湖教時
土屋大志・向藤原由花・奥村弥
村上里奈

名古屋市立大学整形外科 和田郁雄・松井宣夫
名古屋市総合リハビリテーションセンター整形外科

池田威

乳児化膿性股関節炎は早期診断が股関節炎後の後遺変形や機能障害を予防する上で最も重要である。しかし、その診断はX線上の変化に乏しく、臨床所見、血液検査が主であった。今回我々は乳児化膿性股関節炎の2例に超音波検査を行い関節の腫脹を確認し早期に治療することができたので報告する。

8. 脳性麻痺股関節脱臼・亜脱臼に対する手術療法の成績—当園における最近の手術方法—

岐阜県立希望が丘学園

○高見秀一郎・岩佐一彦・徳山剛

当園では脳性麻痺による股関節の脱臼・亜脱臼に対して、以前から松尾の方法に準じて軟部解離術を行ってきた。しかし近年、これに部変更を加えた手術方法を行っている。学齡前児で術後半年以上経過した症例が10例程度となったので、主に、MP(migration percentage), TDD(tear drop distance)等を指標にして、その成績について検討、考察したのでこれを報告する。

9. 最近5年間に初期治療を行った先天股脱症例の検討

浜松リハビリテーションセンター ○山田順亮
名古屋第一赤十字病院整形外科

和泉聖子・山口 仁

我々は従来より山田が考案した Overhead traction 法(以下 OHT)を用い保存的かつ愛護的に先天股脱の初期治療を行ってきた。

この方針で1994年7月～1999年7月までの5年間に初期治療をした先天股脱症例は73例76股であった。その内訳は新生児期の von Rosen 装具例は2例2股、乳児期の Rimenbügel(以下 RB)例は58例60股、幼児期の OHT 例は11例12股、幼児期の観血的整復術2例2股であった。これらの症例につき主として整腹率などについて検討したので報告する。

症例検討

10. 著明な胸郭変形、四肢および手指足趾の軽度の短縮を認めた1例

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科

○友田良太・西山正紀・二井英二

三重大学整形外科 須藤啓広

上野総合市民病院整形外科 山崎征治

症例は5歳、女児。生下時、呼吸障害と胸郭の低形成がみられ、生後10か月時に気管切開を受けている。現在、著明な胸郭の変形と呼吸障害、四肢および手指、足趾の軽度の短縮などを認め、軽度の精神・運動発達遅滞を伴っている。X像では、肋骨の著明な短縮、胸郭の狭小化がみられ、手、足の指(趾)節骨に円錐状骨端などが認められた窒息性胸郭異形成症(Jeune 症候群)を疑っているが、諸先生方のご意見を伺いたい。

11. 躯幹短縮型低身長を呈した1例

愛知県立第一青い鳥学園 ○岡川敏郎・赤木 滋

症例は3歳男児。初診時の主訴は1歳11か月で未歩行。生下時より体がかたいと言われていた。発達診断をもとめられた。このときすでに低身長で股関節や膝、肘などに可動域制限がみられ、IQは正常、尿中ムコ多糖も正常だった。2歳で歩けたが、長ずるにつれ脊柱変形と関節拘縮が目立ってきた。なんらかの骨系統疾患を疑わせる。診断は？

12. 大腿骨頭すべり症後に大腿骨頭壊死を来した1例

岐阜大学整形外科

○野澤 聡・糸数万正・伊藤芳毅

福田 雅・辻 耕二・大野貴敏

清水克時

12歳男。右大腿骨頭すべり症(Acute on chronic type)。平成10年12月右股関節痛自覚。

近医より紹介され、平成11年2月初診、X線写真上PTA 30°の大腿骨頭すべりを認めたが数日後転倒しPTA 62°となった。直達牽引3週の後、in situ pinning 施行。術後5か月にて右大腿骨頭圧潰出現したため同年9月 pin 抜去し患肢完全免荷にて現在経過観察中である。今後の治療につき、ご意見お願いします。

主 題

13. 重症心身障害、自閉症を伴う大腿骨頭すべり症の治療経験

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

○伊藤弘紀・服部 義・沖 高司

矢崎 進

同発達障害研究所

鬼頭浩史

【症例1】13歳、女児。脳炎後遺症にて座位・歩行不能、おむつ交換時の疼痛にて発見され、K-wireによる in situ pinning を行った。

【症例2】11歳、男児。自閉症。跛行が続いた後、急に歩行不能となり診断された。鋼線牽引による整復後、canulated hip screw によるピンニングを行った。

知的障害を伴う本症の2例につき、治療方法・経過を報告し、成因を含めて考察する。

14. 中等度大腿骨頭すべり症の治療方法

名古屋大学整形外科

○小野芳裕・北小路隆彦・大嶋義之

栗田和洋・岩田 久

30～45°の中等度大腿骨頭すべり症においては、治療法の選択に迷うことが多い。今回はホルモンの異常がなく、健側肢に予防的治療を加えず、患側にのみ治療を施行した症例で、術前 posterior tilting angle の健患側差が30～45°のISP症例9例(手術時平均年齢12歳、術後平均経過観察期間3.6年)と、45°未満の骨切り術症例9例(手術時平均年齢12歳2か月、術後平均経過観察期間5.9年)の成績に比較し治療法につき検討を加える。

15. 大腿骨頭すべり症に対する in situ pinning の限界

名古屋市立大学整形外科

○寺澤貴志・和田郁雄・杉村育生

富田浩司・堀内 統・小川 孝

松井宣夫

厚生連海南病院整形外科

土屋大志

名古屋市総合リハビリテーションセンター整形外科

池田 威

当科では大腿骨頭すべり症に対して基本的には in situ pinning を行っている。当科で治療した13症例、16関節を対象として、合併症やリモデリングについて検討した。Moderate slip 群においてもリモデリングが期待でき、in situ pinning は有効であると考えられた。

特別講演

座長：岩田 久(名古屋大学整形外科)

「大腿骨頭すべり症における手術法の選択」

千葉県こども病院整形外科主任医長

亀ヶ谷真琴 先生